

バストス週報

第三百廿五号
昭和卅一年
七月一日
発行
DIRETOR
KOITI MORI
REDATOR
SHION ODA
RUA PRES.
VARGAS 188
C. P. 112
BASTOS
C. P.
誌 次
一ヶ月
80.00

労力補給の道に

呼奇養蚕移民がある……

崎田春一氏談（五月十日農談会）

只今西村さんからバストス産業界の労力不足の点について養蚕移民の片がどうなつて居るかとの説明を求められたが、私は移植民方面の専門家ではありませんが、少し言葉にまちがいがあれば御恕しを願います。現在までの養蚕移民導入の経路を御話し申上げますと養蚕移民は戦後正式なルートによって入国（聖州）ゆるされたもので、即ち移植民審議会の評決によつたものであります。生糸は伯国に於て重要な産物で急速に増産を要するとの理由で、三年前養蚕移民入国許可の申請をして許可を得たのであります。

さういふルートであつたかと申しますと一昨々年当時の移民局長レナトアジ氏と産業組合中央会の堀清氏とが直接日本へ行かれたして、日本の外務省農林省の銜を以て第一回の選考に及第した家族が五十数家族聖州入りをしたのは御存知の通りであります。

バストス産業界の労力補給をどうすればよいか、これは色々な方法も考えられまして、それが日本移民を海外へ導く点から申しましても養蚕移民を招くことは最も当を得た手順と考えられるのですが、第一回が済み、今度第三回となりすと案外申上る（引受）が少いのであります。これは養蚕移民を呼奇せるのに金がかかるとか、申しますと、金はかかるが、養蚕協会の役員があれは呼奇する権利があるのです。会員は月々二十針納入している人であればよい。自分より知人又は親戚も養蚕移民として呼奇せることができず、指する養蚕移民で、まづその申込みを日本の外務省、農林省へ達し海外移住協会にその家族人物を選考させます。金がかかるとか、というところを義務費として協会に納める事で、被呼奇家族はサントス入港後、呼奇者の家まで送り届けてくれることになつて居ります。それ以外に出費は殆んどないといつてよいです。只呼奇せる側には彼らを迎えても

ALFAITARIA IMPERIAL



丸山洋服店

すうりとう上品なフルヤマの服

ワカモト 若元一郎さんの元氣ハツラツ振り

胃腸が丈夫だと、こうも元氣で愉快なものか

わかもとの

あかふと

ニコニコ

わかもとの



わかもとの製造元

東京

わかもと製菓株式会社

伯國總代理店

聖市

バストス製菓会社

よいように多少の準備をして居なければなりません。即ち養蚕小屋と桑園と住宅が必要で、これはバストス支那部長の責任として私が見にくくすることになつて居ります。給金はその身に定めたとおりで、二年後に歩合がでるようになります。養蚕移民を迎へるルートは簡単であるが、毎年希望者が入るのには厳しいことです。本年の申込みは、まづ僅かです。招き橋本氏以外二三家族しかありません。移民呼奇せに決心がなかつたのか、内容が判らぬので手控えていませぬ。微力ながら手を盡します。尚家族

数の棒を抜かすこともできませんが、ニヶ
年は養蚕をやることが条件であるし、又
四年間は農村を働いてもらわねばなりま
せん。(以上談話筆記、又責本社)

入植祭の芝居は 中央男女青年団の主催で

本年七月七八両日の入植祭の芝居は、こ
れまでバストス劇団専売の観があったの
に引替えて、中央男女青年を中心として権
すことになった。バストス劇団としては
後進に道を開く意もあるそうだが、後者
が揃わぬのも一因らしく、今事は指導の
役割を、物になり相手を養成する、と
にたつた。どころで演し物は

現代劇(植民劇)「迷路」二幕

時代劇「明治元年五月十五日」三幕

とさまり目下等中である。この西端と
も島本フオット先生書きおろしの新作脚
本で、新派の方はフオット先生自ら演出指
導、舞台装置にあたり、助監督として新
人、清田春市校長が表情及衣裳振付け
あたつて居る。その熱心な指導振り、ま
ことに添ぐましいばかりで一同カンキ
している。
又時代劇の方は、その道のベテラー、
カスカツタ市の真野四郎先生を招聘して
振舞科白廻し、立廻り等演出指導を御願し
既に教回録練習をやつて居る。
真野先生の指導は中々きびしくすべて
が本式ばかり、うまく役者が覚えてくれ
れば、従来にない立派な芝居になるであ
らうと関係者一同大いに期待して居ると
いう。
前本日は日教が二日であるから、ヒバリ
楽団、バストス劇団、舞踊団申合せ合同
で仲よく時間を割振り、今迄にない愉快
い祭典余興を楽しもうという事になつ
た。

入植祭に寄す

新津牛丸

養蚕にはと養鶏にバストスは
他にいやまるところなりけり

白銀に黄金に薨の葉ごもり蚕
果ては尊とにトコとをなる

暖のおちこちに見ゆ電燈は
えさうめく養鶏の里

Sapataria Hayakawa

カムルナの紳士靴
柔かで軽く上品

早川靴店



入植祭祝賀 生花展出品御案内

本年も例年の通り入植祭祝賀いけ花
展覧会を催すことになりましたので
流派を問わず、御賛同の上奮つて御
出品下さいませ。御案内申上げま
す。いちいち御通知致しますのが本
意でありませが、多人数になりませ
ので、勝手なり週報紙上をもちて御
案内申し上げます。
もし皆様の御存じの方で、この通知
を見落して居られる方があるよう
でしたら御誘い合せ、左記の方々に御
連絡下さいませ。御願申上げませ
嵯峨流師範

- 落 亀 江
本 田 益 子
石 橋 敏 子
宮 武 勝 南
織 田 千 子
重 道 必 子
梶 家 好 子
本 田 た 子
池 坊 教授
會 場 元ソカバナエスタンのサロン
い け 込 み 七 月 六 日 早 朝 上 り
各 一 位
宮 武 勝 南

ジヤゲツをおとした人へ

去る六月十七日支部対抗野球場見物
中、忘れたものらしく、濃緑色の糸系
ジヤゲツ(かぶるように着る式)淡紅色のレ
ンソに包んで落ちていました。
心当りの人は、週報社までおいで
下さい

Seria pois, necessario andar ainda, e sem descanso, as quatro leguas que nos separavam de Ussel? Vinha chegando a noite, a chuva gelava-nos,

e enquanto a mim, sentia as pernas tezas como barras de madeira.

- Ah! a cessa da mãe Barberin! Afinal um aldeiao mais caritativo do que os seus visinhos, fez o favor de nos abrir a portã de um celeiro.

Mas, antes de nos deixar entrar impôs a condição de não acender luz.

- Dê-me os seus fosforos, disse ele a Vitalis, restitui-lhos-hei amanhã, quando se for embora. Ao menos tinhamos um teto para nos abrigarmos e a chuva já não caia em cima do corpo. Vitalis era um homem prudente, que não se metia a caminho sem provisões. Na mochila que trazia às costas, trazia um grande pão merendeiro, que ele dividiu em quatro pedacinhos. Vi então pela primeira vez como ele mantinha a obediencia e a disciplina no seu rancho. Quando andavamos de porta em porta, procurando abrigo, "Zerbino" entrára numa casa, e saíra de lá imediatamente com uma cõdea na boca, Vitalis não dissera mais do que isto: Logo a noite, "Zerbino". Eu já não pensava naquele roubo, quando na occasiao em que o nosso amo cortava o pão, vi "Zerbino" pôr-se de cara triste.

Vitalis e eu estavamos sentados em cima de dois molhõs de feno, ao lado um do outro, "Joli-Coeur" entre nós embos; os tres çõs estavam formados em linha adiante de nós, "Capi" e "Dolce" com os olhos fixos no seu dono, "Zerbino" com o focinho pendido, e as orelhas baixas.

- O ladrão que saia da fileira, disse Vitalis, em voz de comando, e que vá para um canto; deitar-se-á sem cia. Imediatamente "Zerbino" deixou o seu lugar e arrastando-se foi-se esconder no canto que a mão do dono lhe indicara, meteu-se completamente debaixo de um monte de feno, e nunca mais o vimos; mas ouvimo-lo assobiar lastimosamente dando uns gritos abafados. Depois de cumprida esta operação, Vitalis deu-me o meu pão e enquanto comia o dele, repartiu por bocadinhos pequenos entre "Joli-Coeur", "Carmo" e "Dolce" os pedaços que lhe eram destinados.

Durante os ultimos meses que vivera com a mãe Barberin não fõra de certo animado; contudo a mudança pareceu-me dura. Abatido pela fadiga, com os pés esfolados pelos tamancos, eu tremia de frio no meu fato encharcado. Finha já anoitecido de todo, mas eu não pensava em dormir.

- Batem-te os dentes, disse Vitalis; tens frio? - Algum.

- Não tenho um guarda-fato muito bem fornecido, disse ele; mas aqui está uma camisa enxuta e um colete em que te poderas embrulhar depois de de teres despedido a tua roupa molhada; em seguida meter-te-as debaixo do feno e não tardarás a quecer-te e a adormecer.

Seria isto agora todos os dias assim? andar sem descanso debaixo de chuva, passar a noite num palheiro, tremar de ter para a vela apenas um bocado de pão seco, ninguém que me lastime, ninguém que eu ame, sem a mãe Barberin? Quando pensava assim tristemente, com o coração oprimido e os olhos cheio de lágrimas, senti passar-me pela cara um sopro tepido. Estendi a mão e encontrei o pêlo lencudo de "Capi".

Aproximava-se devagarinho de mim, avançando com precaução sobre o feno e cheirava-me; fungava baixinho; o seu halito corria-me pela cara e pelos cabelos. O que queria ele? Dai a pouco deitou-se sobre o feno mesmo ao pe de mim, e poz-se delicadamente a lambem-me a mão.

Enternecido com esta caricia, levantei-me um pouco e beijei-o no focinho. Deu um grande gemido, e logo muito depressa, meteu o focinho na minha mão e não se mexeu mais. Esqueci-me da cansaço e dos desgostos deixei de sentir a garganta sufocada; resperei; já não estava só; tinha um amigo.

No dia seguinte pusemo-nos, cedo, a caminho.

Acabara-se a chuva; estava um ceu azul e graças ao vento seco que soprara durante a noite, havia pouca lama. Não tendo nunca saído da minha aldeia, estava com empenho de ver uma cidade. Devo confessar que Ussel não me maravilhou absolutamente nada. Uma unica ideia enchia-me a cabeça e obscurecia-me os olhos, ou pelo menos não os deixava ver senão uma coisa; uma loja de sapateiro. Por isso, a unica recordação que me ficou de Ussel foi a duma loja escura e cheia de fumo, situada ao pe do mercado. No entanto, Vitalis sabia o que fazia vindo a essa loja, e em breve tive a felicidade de neter os pés nuns sapatos ferrados, que pesavam bem dez vezes mais que os meus tamancos. A generosidade do meu amo não parou ai; em seguida aos sapatos comprou-me um casaco de veludo azul, umas calças de lã e um chapu de feltro; enfim, tudo o que me prometera.

(continua).-

本三二回にわたり聖市で大あたりをとった
クランプリ映画

奥地では第一番にバストスで封切り

堂々二時間半の大作

大評判の大映画見のかすこと勿れ

東宝作品

七人の侍

監督 黒沢 明

七人の侍

- 島田勘兵衛 (志村 喬)
- 浪人勝四郎 (木村 功)
- 菊千代 (三船敏郎)
- 五郎兵衛 (稲葉義男)
- 平八 (千原しのぶ)
- 久藏 (宮口精二)
- 七郎次 (加東大次)
- 万造 (藤原 泰)
- 茂助 (小杉 義男)
- 万造の娘 (津島 恵子)

七月六日夜八時より一回 (前回広告誤記)

〃 七日午後二時 夜八時 二回

〃 八日午後六時 夜八時半

シネマバンディテス

映画批評家が
筆を揃えて

スイナミックな
作品と賞す

真下先生近況

七月半ば 三度来植中宛

真下先生から次の様な愉快な通信が
りました。皆さんに読んでいたゞきます

週報有りがたく拝受致しました。私に
関する記事は何となく氣取しくなり
ました。私としては何となく為すべき事をな
した道でおほめに頼るなどといふ事でもな
い事でありませぬ。

コレがストロ口に於ては一時多忙を極
めたが、今ではトラコーマも一
落つき、目下は主としてバストス同様
翼状贅肉の入院に力を注いで居ります。
ホストナサウラのドクトルが非常なる
協力をしてくれ、ドクトルの名義
で全責任を以て監督して下さるので感
激して居ります。そして私の治療の標
本を見学し、尚又入院患者に何となく
なく助言指導をしてくれるなど本當に
感謝の限りであります。

二回は御地と異なり患者の範囲も小
いので七月中旬か一先づ打ち切る事
が出来ます。既に御さき及びの事と思
います。八月のDr No DAの眼科専門医と

して中地病院にのり込む事となり、私は
健康と気力の許す限り分補として三度
中地病院に行く予定となつて居ります。
何事も三度となると

目のドクトル 今 鼻につま
とバストス人からヘナグラレル事を十二
分覚悟して、只々一人でも眼の健康の一
助となる事が出来ればと念願して居りま
す。

喧嘩相手のDr No DAと私のコンビによ
ていかなる場面を展開するや、私とし
ても、このも一寸好奇心にかられ居
ります。
内外科婦人科より心機一轉、眼科に転
じたるDr No DAの快腕鬼手仙心の妙技を
必おや拭目に値するものありと堅く信
じて疑はぬものであります。(真下 誠)

おしらせ

来る八月一日より眼科治療を開始いた
します。専回医は

農田眼科医 及 真下眼科(助手)です

バストス 病院

七人の侍

解説

来る七月六七八日三日間当地シネ
 パンネラシテ「七人の侍」が上
 映される
 一応解説をよんでおくことよけい興
 味があるだろう

タイナリズムな作品
 七人の侍 (東宝)

全体に力がみなぎって、これだけ力
 動感と量感を表わしたことは成功であらう
 野武士に荒され、七人の侍を雇って戦う
 ある農村部落が、七人の侍を雇って戦う
 話である
 冒頭に野武士団が山間の村をみつけて
 この村は去年米を盗り奪ったから、考
 の收穫この天撃あつたと話して去る。草
 どそれを盗った一農民が村へ報告。村落
 全員が集って途方に暮れている場面が次
 に出ると、もう襲われたあとが錯覚する
 ころは冒頭の録音効果不良と全話によ
 くささとならないためも手ゆる
 村民代表が村の長老の爺さんに相談し
 て腹のへった侍を雇って戦うことになる
 万造(藤原釜足) 茂助(山形義典) 与兵衛(左
 全) 利吉(土屋嘉男) の四人の百姓が断
 出て、ヤセ浪人をさがすあたりも描写がア
 イマイだが、島田勘兵衛(志村喬)とい
 う浪人の登場で、ヤセと生彩を見せる。こ
 の挿話は面白い。ある豪農の家で盗賊が
 入り、子供を人質にして土蔵に逃げこんだ
 と人々騒いでいる。勘兵衛は子供を助
 けてやろうと川ぶちで行きかしの僧と頭
 鬘をおとして貰い、僧形になり、メシをも
 って土蔵へ近づき、賊のスキに飛び込んで
 切る。この切られた賊を高速で撮る効果も
 四人の百姓も感服するが、若い浪人勝四
 郎(木村功、好枝)も尊敬して弟子入りしそ
 うで見ていた粗暴で茶目な浪人菊千代(三
 船敏朗)もあとで仲間に入る。勘兵衛と勝
 四郎は百姓の頼みを聞いて、メシを腹一は
 い食わしめてもらおうだけの約束でサムライ
 の同士を募る苦心をする
 この映画は戦国時代の庶民生活が如何
 に貧乏なものであり、戦にやぶれまを失
 った浪人が如何にヨリヨリしていたかを
 描くわけだが、やっとなつた七人の侍の
 風俗にして、在来の時代映画と遠い寫
 実的である。が中にも菊千代の風態は奇
 抜で、長刀をかろく、ハカマもつげず、
 食のようであるが、この頭の少し足りない
 無邪気で粗暴な浪人が最も秀技
 七人の侍には個性の面白いのもあり、

沈着で徳のある五郎兵衛(稲葉義男)マ
 キと割って暮している屋敷のなかい明るい
 平八(千秋実)虚無的で冷たい感じだが無
 類の剣客たる久蔵(文学者の宮口龍三など
 二北らのサムライを集める挿話も面白
 が七郎次(加東大介)だけは勘兵衛の元
 の部下であった
 全体を通じて今度は三船が最良の出未
 中々喜劇的、豪快な演技。次いで志村
 が、宮口の性格描写も特に推賞したい
 百姓の中では左全と藤原釜足が滑稽
 津島恵子(万造の娘)は武士の勝四郎と志
 仲になる役だが可もなく不可もなく
 中の一団が村へ着いての六戦準備だか
 箱を刈り入れてから田に水を入れ、二方
 面の入口にはバリケードを築き、裏山か
 らの入口を攻め入れるようにする。戦
 端開始までには敵の物見が三名入りこみ
 これを久蔵が切つてすてる話もある
 野武士団は四十騎、そのたむろする山
 塞を先攻れ、久蔵、平八、菊千代と案内の利八
 が出かけて放火し、山に出す奴を十名ほど
 たたき切る。ロケーションも佳良、火災の
 大撮影もみりである。ここで平八が戦
 死する。敵は鉄砲を三つうちもっている
 夜中に久蔵が単身のりこみ、二名を切り一
 銃を奪って帰る挿話が秀逸。それを真似
 菊千代も出かける話があり、この方は滑
 稽味がある
 勘兵衛の作戦は裏山の入口から騎馬群
 が攻め入る時、先頭の一騎をけ入れ、あと
 は百姓たちの竹槍のフスマで防ぎとめ、
 かくて入れた一騎を追い回してたあす作
 戦、これを数回くりかえすうちに敵は十
 三騎に減じ、最後の決戦で十三騎全部を
 村落に入れて絶滅するのである
 この最後の合戦描寫は雨中泥濘の中で
 の撮影で、壮烈なものである。五郎兵衛に
 次いで久蔵、菊千代も戦死するが、残っ
 た侍は勘兵衛、勝四郎、七郎次、百姓に
 も戦死者を出さず、丘の上に死者を葬り、土

讓 鮮魚店

最良のポイントにて、目下盛業中の店
 製氷機付バルコン、ブリ、ゴリ、フエッコ、及
 デポジット用冷蔵庫等一切完備
 右轉業の爲め讓りたし

委細面談

パール 柳 浦

まんじゆうの墓に入ぐが礼拝する場面は
悲壯な美しきと詩味を流露させる。
この大作はその分量の割に内容がや
軽いついふ不満もないではないが、しか
し思沢明は今日の日本の監督に類を見な
いような雄健な豪快なタッチを見せ
終始マイナミックである。その点画調に
中井朝一を欠くうらみはあるが何よりも
と、早坂文雄の音楽が優れてゐることを
評記したい。その音楽主題はたがたが響
化を見せて現われるがスケールと悲壯美
と持ちこの大作にふさわしいものである。
(週刊朝日 二九年五月二十号 誠篤堂より (佳作))

映画鑑賞批評會

七人の侍 は相当評判のよい優秀
映画とのことですが
ごらんになりた方々の鑑賞或は感想
批評をきき度いと存じます
○七月九日(月)午後七時半
○場所 バストス週報社
○会費不要
右御案内いたします

Benzene

ベンゼネックス

棉作 野菜 西氏 珈琲 用
各々がた害虫ですから
ベネーノもそれそれ
作物に交じてちかっています
肥料も バタタ用 野菜用 棉用
といろくあります
会社より直送するよう 御取次
いたします (条件すぶるよろし)

申込所 太郎田商店

マキナデコスツラ
ベンゼル いよく好評

シンガーミシンなら今更ちよろしくの
必要もありません
手軽に入手ご希望の方は
太郎田商店ミシン部へ
おこし下さい

御案内

故者永宗義氏は、当バストス移住地
開拓の爲の昭和三年畑中支配人に随
行し開拓事業に活躍されて居りまし
た。最近の腰痛に倒れ、あたら後多
の香秋をのこして長逝いたしました。
当時移住地葬の葬送を受け、本年
二十七回忌に相当します。下記
団体並に故人と昵懇であった人達と
で藤本開教師を招き左記に依り法要
を営むことになりました。故人
と親交のあった方々へも御相談いた
す可きでありましたが、つい通知済
れもあるかと存じますので、ここに
紙上を以て御しらせ申上げます。何
卒多数の方々に御仏参頂き度く此段
御案内申上げます

七月八日午前十時 墓地にてお經
オニバス発着所前に車の用意がしてあり
ます故、墓地行には御利用下さい
七月八日正午 一線会館にて法要
發起人

- (オニバス連合日本人会長 谷口 章
バストス佛教会長 石橋長 見
バストス青年団長 池田好 枝
バストス婦人会長 畑中仙太郎
佐藤福太郎
板垣泰熊
後藤利一
梶原義一
吉田与三 吉
吉川一馬
山中三郎
崎田春一
中園草人
西 静

Sabão ALBATROZ



Melhor サボン
アルバトロース
一度つかたらやめられぬ
よこれが つるりと
おちるさかい
掌があれまへんさかい
毎日安うおまんね
タヌなウもつとええ...と
ワテ百人まにヨウいわんわ
各商店にあり

25-1-1

一九五六、六、二十三日 (於産業會館)

本年度入植祭行事に関する 男女青年役員會

去る六月十四日連日理事會にて本年度入植祭を来る七月七、八日と決定されたるより、本團に於て之に基き、左記諸項の決定を見た。

一 聯合青年團の担当部門

- A 農産品、手芸品展覧會 (会場産業會館)
 - B 演芸場に於ける賣店 (演芸場構内)
- 代表責任者 聯合團員長 西 徹
副團長 戸田 幸
崎 田 春一

A 農産品手芸品展覧會

- 役員 會場責任者 小沢将男
總務 橋本輝敏 中岡俊彦
會計 水馬孝昭 池戸博久
- 展覧部及受付係
鶏卵部主任 中岡 担当支部 G1、A、ESP
- 穀類部主任 水馬 垣本 C、S、B
担当支部
- 野菜果物部 豊田、島崎、谷目部
担当支部 F、U、P
- 商部 主任 伊勢島、石田
担当支部 G2
- 手芸品部 清家女子部委員
担当 各支部女子團員

以上担当支部は準備より各受持区域に入り会期中は各二名各一名當番を置くこと

準備 七月五日午前十時より左記支部員各半數を以て作業に當る

A・B・F・G1・G2・S・U2

持参道具各自マルチロー丁、及支部より鋸一丁

出品受附 七月六日午前九時より正午迄とす (規定時間後は審査せず)

受附師は前日不役の半數出役のこと

出品規定 出品物は自作の農産品、加工品、手芸品、家畜

数量規定 卵一打、蕎麥キロ、穀類一キロ、果物大半打、小一打、野菜三束、イモ、葉半打、トマト一打、其他適量 (以上一桌)

出品物は返却せず、主催者側に閉会后処分し本会の費用に充當す。尚出品物購入希望者は展示中申込、閉後受取られ度し

○ 審査 六日正午より開始

一般農産品の審査はツパン主任農業技師、D・ホーギス氏に依頼し、必要に依り地元より補佐役を选考す

○ 鶏卵は バンテラシテ浅井技師、島崎氏、及 G1、E 岩田氏に依頼

○ 棉花は バネ大製棉工場山中陽之助氏

○ 手芸品は 家政女学校本田、尾形先生、落巻、福徳園村各裁縫学校長、中学教員イッ、リッ人先生、畑中先生

○ 開場準備 七月七日午前九時畑中市長の手にて開場式、午後五時閉場

八日も前日に準備

後片付け 九日午前十時より各支部四名宛各自マルチロー持参

女子は六日より出役、各支部よりの出品数に依り人数を適宜決定、後片付け同じ。

表彰 例年の通り賞状及賞品を授与す。此の時期日本部二任り、費用は市役所に依頼す

B 演芸場 賣店

本収入、陸上及野球の運賃に折半す

役員 總務 島本昇 柳浦者三
會計 谷目部澤、島池豊
仕入部 前山義雄
販売部 太郎田 衛
賂部 其の道の達者な方に依頼

賣店 バカ工事の爲め五日午前十時より左記支部に當る

C・E・P・道具 エンシャータ、カバネラ、他はマルチロー支部各

備品の準備は前記役員に當る

当日の出役 七八兩日共各支部より男女二名宛、午後五時迄に現場に集合

受持を左の如く定む

第一日 A・S・B・C・U2
第二日 G1・G2・F・P・E
U1、CH4

尚準備の日 (五日) に全支部より竹串五百本、パンノニ枚宛、持参のこと

右担当自動車はカスカッタ区受持

C 野球大會

特にヒルの催しとして野球大會を開催する事と決定

バスを全城南、中北、の三部に分け各支部より選抜した選手によりチームを編成し、リース戦を行う

期日 七月七日午前八時より 以上

少年野球部

世訪人より發表

来る七月八日 (日) ソロ線の本年公表マツレード少年軍が遠征して参ります。バスターズ軍と一戦を交えて力量の程を見よう見せようという事になりました。中央球場へ行いで下さい (カニオンです) から時間日正確にはわかりません

1^o Campeonato dos Seleccionados de Base-Ball de

祝 第廿八回 バストス入植祭

第一回 バストス選抜野球大會

B A S T O S

主催 コミッソナムニシパル・デ
エスポルテス・デ

バストス

後援 バストス 聯合青 陣 A年 B団

大會役員

總裁 市長 畑中忠雄

名譽會長 連日 谷口 章

會長 西 徹

總務 ADB 奥田 耕

總務 崎田 春一

戸田 宰

審判長 太郎田 衛

本田 正雄

記録部 渡辺 孝

上田 敏雄

場内整理 栗池 豊

柳浦 省三

他に伯人二名

南部陣容

監督 坂垣 垣

主將 竹内 内

推原兄、柏原弟、北谷
中田、西村(以上S)
池田兄、池田中、池田弟
島崎(以上U2)
大倉(CHA)

北部陣容

監督 小橋 橋

主將 渡辺 辺

加藤、東、與水、上山(C)
田中、岡田、河内、中浦、弓削
安斎兄、安斎弟(以上A)
宮沢、後庭兄、後庭弟、草野(以上)
三次、河村兄、河村弟(GI)
氏名不詳(エノキチーム)

中部陣容

監督 竹内 内

主將 戸田 田

黒川、横田、藪内兄
藪内弟、水馬、谷田部
渡辺、小林、能見
田中、佐藤兄、佐藤弟、武野
島本、嶋原、穂井田、大和田

入場料

大人 十針 学生 五針
婦人と子供は入場無料 (入場料は野
球部が担当
の一端に過ぎません)

スコア SCORE		チーム
南	北	一
部	部	二
部	部	三
部	部	四
部	部	五
部	部	六
部	部	七
部	部	八
部	部	九
部	部	補
部	部	計

リーグ戦

ブラジルの薬草

10

十六 日本名ヒガンバナ 石蒜

Amaryllis do Cane *lycoris radialis*

日本国中山州原産防路傍等に自生する花が咲く

水油の採り球茎が大量の澱粉を含む

徳川時代末期の大饑饉の際、高の根

を採り粉の木のアマ皮まで食べたと云

キツネノカミソリやヒガン花の球根を食

べると毒は中毒したもので、毒時のこ

とを知りて居る老人から聞き出した。無

意蔵にあるのと採り荷が楽なところか

ら戦後食料澱粉の製造をやつて見ました

澱粉はアロートルトのものより高価

高価を織物用の糊として産産を高めたこ

とがあり、日本では澱粉をとつた粉

を粉末にしたものを洗滌料に吸着相当の

量が行がりました

アマミバ、赤痢の特効薬となつて居ります

が日本ではこのヒガン花から塩酸がビド

コリコンをこして居り、このものがエメ

ンより赤痢菌に強力に作用すること

又毒性も弱く、催吐作用も強くない事を知

つていたと云ふことでも、生薬として

上記の病氣（肺炎、胸膜炎、腸炎、腹膜炎、

リコアを皮下注射する）に用うる時は乾物

一五g水一〇〇ccを一日量として煎劑

として服用する

民間薬（當地に生れ居るのを見て

と見あつて見ました）助膜や腹膜炎等の

水をとるときは球根をセトモノですり卸

し、それと蒸森を同量をすりつぶしてまぜ

紙に粘りあわせたものを五分位の厚さに

ぬり両足のうらにはりサラシでゆわえ

日に一回取替える。大抵二三日目から小便

が繁くなり腹も緩くなり、熱も

下り便通もよくなり、早い人は一週間で全

治するものがある。良法であります

文献 近藤平三郎 薬学雜誌四〇二二三

四九、五四五 五〇、四三八、五二、四三三

森島庫太 明治廿九年一月十四日

朝比奈恭彦 大正二年三月七、六三七

筆名 小野山 生薬 竹成

六月二十九日 十時より

エスヘランナ 蚕祖神社例祭

バストス少年野球軍 六月廿九日 早朝

スアララベス少年軍と対戦の爲め

声 書

本月初旬の選報(三三三号)に痛涙籠り通る
と題し、川口に不詳事件がいかにも起つた
かの如き記事がありましたが、當選に於て
は斯かき不詳事件の不詳事件はミジンコに
無く斯かき不詳事件の不詳事件はミジンコに
か、わが町を飛ぶに、正然とせよ、無頼漢の
に流言蜚語を飛ばし、正然とせよ、無頼漢の
ある事、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
へ、噂のまじり、あり、言論の自由と云ふ、社
会人の最も面目に關する事柄を、其、其、其、
も、瀾か、まじり、と、之を、文、章、化、し、我、が、不、
ア、人、は、大、小、道、も、な、く、一、般、社、会、人、を、疑、か、す
か、如、き、行、為、は、爲、に、快、む、べ、く、と、ある、と、極、言
する、心、の、ご、あり、ます

違 誌

右、右、明、書、に、関、し、て、は、事、實、を、調、査、も、し、不、
の、ま、を、記、載、し、た、事、は、小、林、の、輕、率、行、爲、で
有、る、事、を、ス、ロ、リ、ア、正、正、の、皆、様、に、御、詫
申、上、り、ま、す

みしん修理について

みしん修理師と稱する人、今、今、で、當、地
にも、幾、人、も、ま、わ、つ、て、未、だ、が、ど、し、と、す、る、と
余、計、甚、く、な、た、と、い、う、よ、う、な、程、度、の、人、も
あ、つ、た、と、い、う、事、ある、と、こ、ろ、が、本、年、二、月、頃
から、中、区、カ、ス、カ、ツ、ク、区、方、面、を、巡、り、て、い
る、芝、伯、明、と、い、う、リ、ン、ス、カ、ら、未、だ、人、は、註、意
に、は、事、が、念、入、り、で、感、謝、さ、れ、る、評、判、が
よ、い、目、下、ウ、エ、オ、ン、見、込、道、を、訪、問、中、と、い
う、修、理、希、望、者、は、よ、く、本、人、の、説、明、を、き、き
納、得、の、上、で、依、頼、せ、ら、れ、る、と、い、い

新 荷 おしりせ

- カネー 鏡 (ミモカ) フェルベトドレス
- 肉ひき機 (フアマ) ランカの新ホヤ
- エンシヤドン (カラス) 左へのふた (アルミ)
- コンシヤ (フタ) 右のふた (アルミ)
- エスタンテ ガラス瓶 各種

浮田金物店

Nossa Relojoaria

AV. TAMOIOS 785 TUPÁ

時計店

トウパンで一番大きく信用あるトイ店



Para completar a sua e a felicidade de sua noiva adquira suas alianças na

Nossa Relojoaria

バストス歌会

第六十七回(六月十日小栢店)

席題 「落葉」

得点 10 扶美 6 子エ 羊鈴 5 菊子 4 代子

漁 佛桑花を鮮かに咲く下辺

古き落葉に木レグムは落つ

扶美

娘 もう一日照れば焚かんと掃きたの

十落葉にまたしそそが雨音

子エ

孫 朝掃き一庭に一葉病葉の

音なく散りて吾家ひをけし

羊鈴

冬深みハイナも日々にくらみ

諸枝の黄葉も散りつきたり

菊子

散りしきて足裏にやわさ感触り

落葉をふみて音なきを成る

代子

昏れなぐむ庭に風去るかそかなる

音立てて舞ふ落葉わかしく

孤舟

零落の彼の噂も立ち消えて

柿の落葉は積極に散る

修あ

落葉払ふ庭の机に向き合いて

君の冷たき手に触れし今

一男

御しらせ 次回の例会は七月十五日(第三日曜)です

懇親同好の士 新人の御参加をふまう致します

本紙値上について

諸物価(紙その印刷費に因する)攻勢に
対抗できず 本紙値上のやむなきに
到りました。

來年(一九五七年)一月よりまき

の 金を百針 御諒承下さい

バストス週報社

柿しぶあり

アルト

西柿園

快眠で不景氣風も

なんのその

此の標語をがぶしてフジル中の皆
様に元氣な明日の活動力を与える可
く邁進して来ましたコツシヨンデ
モーラ製造会社をイラド・ラール会社
も諸物価の高騰に伴ない、来る八月
より値上りの止むなきに到りました。
此の期を逸せず(七月中の)安い中に
御家庭にコツシヨンデモーラを備えま
ししょう。

僅か百五十針の月掛けで二十ヶ月後
には上等のコツシヨンが自分のものに
なり、しかも毎月抽籤で一等四十コ
ントス以下多数の賞品が當ります

フジルで唯一の好条件つき

コツシヨン・モーラ製造会社

フエーラド・ラール会社代理人

戸田 幸年

(お申込みはバストス商業事務所内)

讓店

目下盛業中の理髪店ですが上聖につ
き、居ぬきのまま、ゆつります。も
し素人の方でしたら暫時の期間何か
と指導して差上げます故に遠慮なく
御申出下さい。譲渡料とはいつて
も極く僅かなもの、道具代にすぎま
せん。しかし中々馬鹿にならぬ仕事
です。事情は詳細週報社に話してあ
りますからお聴取下さい。又は直接
上杉まで

娘さんを求む

サンパウロで日本人良家の家庭
住込、通学の便を与えます
希望の方はブラ栢製糸会社事務所内
齊藤義雄又は齊藤定へお話し下さい
奈細面談

家事見習娘さん 二名入用